



野鳥の 不思議解明 最前線 #78

文 植田睦之

© Japan Bird Research Association, 2012

春、北へと渡るカラス類の群れ
撮影●植田睦之

普通の鳥は無理しない

～風をうまく使うカラス、のんびり渡るカモメ～

先月、佐渡に森の鳥の調査に行ってきました。今年例年のない積雪ということで、しっかり積もった雪の中、調査してきました。冬の北海道にはよく調査に行くものの、東京育ちのぼくにとっては雪の中の山登りは非日常。スノーシューを履いてエッチラオッチラ、すぐに疲れてしまいます。筋肉痛にならなかったことだけは、自分を褒めてやりたいと思います。

ぼくにとっての雪山と同じかどうかはわかりませんが、普通の鳥にとっての渡りも、非日常の大変なことです。長距離渡りをする鳥は、2012年1月のニュースレターのアカヒゲの生態図鑑でも紹介されているように、翼の形が長距離飛行に適した形に変わっていたり、この連載の62号で紹介したように、内臓の構造すら変えたりしています。そして、渡りの危険を最小限にするために、最短距離を一気に渡るような渡り方をしますが、それほど渡りのために特殊化していない「普通の鳥」はどうしているのでしょうか？いくつか普通の鳥の渡りについての研究があったので、紹介したいと思います。

1つめの鳥はカラス類です。ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos* やハシボソガラス *C. corone* は留鳥のように思われがちですが、北に生息しているものは渡りをします。北海道では続々とロシア方面へと渡るカラスが見られます。北海道日本海側の小平町で、ぼくが行なったカラス類の春の渡りの調査から、カラス類が風向きに応じて渡る場所を臨機

応変に変えていることがわかってきました。南北に海岸線がのびる小平町では、西風が吹くと海岸段丘に斜面上昇風が生じます。西寄りの風が吹いている時は、カラス類はこの海岸段丘の上昇風を利用して飛行し、風が東寄りに変わると内陸を飛ぶなど、長距離渡りの鳥と同様に風をうまく利用して渡っていることがわかってきました。

2つめの鳥はニシセグロカモメ *Larus fuscus* です。イギリスからスペインやポルトガルなどへ渡るこの鳥の渡り経路をGPSで調べた調査からは、ニシセグロカモメは長距離渡りの鳥のように一気に渡ることはせず、海岸線をすこしずつ、ゆっくり渡ることがわかりました。長距離の渡りをしない普通の鳥は、長距離移動に適したとがった翼よりも、小回りの効く短い翼の方が良いなど、長距離移動よりも通常の生活に適した身体をしているのだと考えられます。そのような鳥にとって、一気に渡りは負担が大きいため、少しずつ移動するのが、渡りの危険を小さくする良い方法なのかもしれないですね。

紹介した論文

Klaassen, R.H.G., Ens, B.J., Shamoun-Baranes, J., Exo, K.-M., & Bairlein, F. (2011) Migration strategy of a flight generalist, the Lesser Black-backed Gull *Larus fuscus*. *Behavioral Ecology* 23: 58-68. doi:10.1093/beheco/arr150

植田睦之 (2012) 風向に応じて飛行場所を変える渡り中のハシブトガラスとハシボソガラス. *Bird Research* 8: S1-S4.